文芸学部英語多文化コミュニケーション学科
秦　辰也

これまでの活動と研究分野

学生時代アメリカ南部に留学し、経営学部で経済を学んだ。その間、多数の留学生と知り合い、途上国の貧困や難民問題に関心を持った。卒業後、帰国して大手企業の英文資料を作成する東京の情報処理会社に就職したが、その後カンボジア難民救援に取り組むNGOを知人に紹介され、活動に参加した。

タイへ赴任後、国境の戦場付近で難民の人々と出会い、彼（彼女）らが母国に一刻も早く真の平和が訪れ、子どもたちと故郷に戻って安心して暮らしたいと願っているのを肌で感じた。その時、背後で複雑に絡み合う国際政治、経済、社会、文化的な問題を知り、国際協力やボランティア活動の必要性を痛感した。

東西の冷戦構造下で、タイの国境周辺ではベトナム、ラオス、ミャンマー（ビルマ）から迫害を受けて逃れてきた難民たち数十万人が暮らしていた。加えて、国内では少数民族の人権や環境問題、都市と農村の経済格差も深刻で、首都バンコクには千ヶ所以上ものスラムやスクォッター（不法占拠者）が住む居住地区が存在した。また、こうした社会問題を背景に、民主化を求める市民の動きも活発化していた。

カンボジアの和平問題と併せて、バンコクの都市スラムの貧困問題に関心を持つようになり、経済発展と民主化の関係や、タイ東北部の農民や都市のスラム住民がめざす“下から上へ”の内発的な発展の中に貧困や難民問題を解く鍵があるのではないかと考えるようになった。そうした中で1991年、タイで軍事クーデターが起こり、翌年5月にバンコクで起こった流血事件に遭遇した。スラム住民のリーダーたちもこの民主化運動に深く関わっていたことから、93年にタイの貧困と民主化をテーマにした「バンコクの熱い季

節」という本を出版した。

また同時期、カンボジア問題ではパリで和平合意が結ばれた。国境からの自主的難民帰還が始まり、国連監視下での総選挙へと事態が展開した。そこで、それまでのNGOによる国際協力活動を基に、「アジア発、ボランティア日記」を出版した。さらに、97年にはタイの都市と農村の貧困問題をテーマに「転機に立つタイ」、日本人としての国際ボランティア活動をテーマに「体験するアジア」、99年には日本の若者たちに向けて「ボランティアの考え方」も出版した。

NGOに参加して17年が経過した2000年、東南アジアでのフィールドワークを基礎にして都市スラム問題を本格的に研究しようと40歳を機に休職して2年間大学院に在籍し、住民参加型の居住環境改善について学んだ。その後、NGOのフィールドに再び戻り、運営やネットワーク業務にも携わる傍ら3年間都市工学からの研究活動も続け、多変量解析や参加型ワークショップを重ねて都市スラムをテーマに研究論文を執筆した。そして、その成果を2005年に「タイ都市スラムの参加型まちづくり研究」という形でまとめた。

これからの活動と関心分野

大学に移るまでの24年間、日本のNGOスタッフの一人として主にアジアで国際協力に従事してきたが、「開発」というテーマの中でも特に「子ども」、「教育」、「文化」という視点から、参加型で行う都市と農村コミュニティの「発展」に関する研究を進めてきた。また、2001年にアメリカで同時多発テロ事件が起きた後は、NGOの活動でパキスタンを経由して頻繁にアフガニスタンを訪ねたことから、関心テーマはさらに広がり、社会開発へのアプローチから平和構築を促していく方向性が模索できないかと考えるようになった。

これまでは東南アジアでも特に仏教文化圏での活動が主であったことか

ら、自然環境も含めて社会・文化的な背景が異なるアジアのイスラーム文化圏のコミュニティレベルでの活動が、如何に異なるものかを実感するようにもなった。多民族社会の多様な文化の中で、伝統的な価値に根差した長老社会の保守性を堅持して生活している人々と、国内外から入ってくる「外部者」との関係は、一体如何にあるべきなのか？農山村での生活は、グローバリゼーションの中であらゆるものが集積する都市の近代的できらびやかな生活とは対極にあり、そこで起こる格差と貧困の問題は、構造的にはどこも類似している。よって、そこで抽出される共通課題は、「どのような開発のあり方が人類に平和をもたらすことになるのか」という、地球規模の次元でも繋がってくる。

整理すれば、今後の関心テーマは、「平和」をもたらすための「開発」のあり方を、仕組みづくりと人間の内発的な面の双方から追究していくことである。マクロな視点からは、グローバルな経済発展が求められる一方で、人口が爆発的に増加し、環境問題が益々深刻化する今日の地球社会において、どのような「発展」のための仕組みを個人レベルや家族レベル、あるいはコミュニティレベルからの着想で可能にすれば身近な貧困問題を克服し、持続可能な地球社会の開発（発展）の方向性を見出せるのか、ということである。そして、それを個々の内発的な試みとして捉え、その仕組みを有機的に現実社会で生かす上でどのような理論を基にそれを実践していくことが可能なのか、国内外の各地域の取り組みの事例も含めて研究し、真の開発のための思想的な構築についても研究を重ねていければと思っている。